

	第4回	コミュニケーション競争としての冷戦モデル（現下の国際情勢） 国際社会の態様がコミュニケーション能力によって大きく左右された実例として、現在の国際情勢を取り上げ、コミュニケーション競争の視点から現在の国際情勢を分析する視座を説明する	—	対面
	第5回	情報社会学の視座 21世紀の社会の動きに関する近年の情報社会学の研究成果を紹介し、情報社会学の視座によって社会の動きを分析する手法を示す。	—	対面
	第6回	情報社会学の文明論 今日の国際社会の本質を適切に捉える枠組として、情報社会学の文明論の分析枠組を説明する。	—	対面
	第7回	情報社会学で捉える今日の国際社会 「ラストモダン」として捉えられる今日の国際社会の基本構造を説明する。	—	対面
	第8回	「ソーシャル」の原理と未来の展望 情報社会学の基本概念である social、conviviality 等を説明し、国際社会の今後の展望を説明する。	—	対面
	第9回	情報社会学実践コミュニケーション 情報社会学のモデルに基づく、国際場裡における実践的なコミュニケーション手法の理論的な枠組みを説明する。	—	対面
	第10回	情報社会学実践コミュニケーション 情報社会学のモデルに基づく、国際場裡における実践的なコミュニケーション手法の実務を説明する。	—	対面
	第11回	ディベートの手法 ディベートの進め方、論理構築の方法を説明する。（本学のグローバル・コース専用に編み出された、「AIIT フォーミュラ」を使用する。）	—	対面
	第12回	ディベートの手法の理解 学習者が、模擬ディベートを通じて、ディベートの手法を体得する。	—	対面
	第13回	ディベート（予選） 学習者が、チームを組み、実際に与えられた課題に基づきディベートを実践する。	—	対面
	第14回	ディベート（予選） 学習者が、チームを組み、実際に与えられた課題に基づきディベートを実践する。	—	対面
	第15回	ディベート（決勝） 学習者が、チームを組み、予選のフィードバックを踏まえ、実際に与えられた課題に基づきディベートを実践する。	—	対面
	試験	筆記試験を実施する。	—	対面
成績評価	最終試験 50%、ディベートの実践 40%、スピーチの実践 10%			
教科書・教材	前田充浩、国益奪還、アスキー新書、2007。 公文俊平、文明の進化と情報化－IT革命の世界史的意味、NTT出版、2001。 公文俊平、情報社会学序説－ラストモダンの時代を生きる、NTT出版、2004。 公文俊平、情報社会のいま－あたらしい智民たちへ、NTT出版、2011。			
参考図書	特になし			
獲得可能なコンピテンシー		獲得可能度合 (◎ ○ △ -)	獲得可能な内容	
メ タ	コミュニケーション	◎	スピーチ能力、ディベート能力	
	継続的学修・研究	○	「エレガントな」論理構成能力	
	チーム活動	◎	チームで行うディベート	
コ ア	発想力	◎	論理構成力	
	表現力	◎	プレゼンテーション能力	
	設計力	○	論理構成力	
	開発力	○	論理構成力	
	分析力	◎	論理構築能力	

専攻名	創造技術専攻	必修・選択	選択	単位	2	学期	4Q
科目群	創造技術基礎科目群	科目名	技術経営特論			教員名	吉田 敏
		(英文表記)	Management of Technology				

概要	<p>日本は資源立国で無いため、何らかの製品を創り上げ、それを経済の基盤としていく必要がある。高度経済成長期前後を経て、日本は世界に誇るだけの様々な分野の技術力を持つようになった。しかし、近年、各産業で業績や将来の方向性に対して閉塞感が広がっている。この講義では、技術的な基盤を持ちつつ、実際に社会の中で製品やサービスを創っていく上で必要なマネジメントの領域を解説していく。特に、これまでに成功を収めてきた製品やサービスに関する企業や組織の活動に着目しながら、成功する開発行為のマネジメントや、産業や製品の特性による必要な知識を、できるだけ系統立てて説明していくものである。</p>							
目的・狙い	<p>本講義の目的は、技術経営分野に関する内容を俯瞰的に把握すると同時に、マネジメントするために重要なスキルの基礎的な内容を理解できるようになることである。</p> <p>現在の日本の企業活動では、企業の技術力が深まり、高い品質の製品を創る状況が多くみられる。しかし、その反面、高品質の製品が利益に結びつかない場合が極めて多い。これまでは、とにかく品質を上げることのみが重要な課題として理解されてきた。しかし、多くの基盤技術が急激に発達する中、各製品の価値を高めることが品質面だけでない多くの要素に関する課題が見えてきた。その上、創りだした価値を自分の組織の利益などとして獲得することが困難な状況が多く見受けられる。学習者は、実社会の企業活動の中で製品やサービスを創るために、どのような考え方をすべきかについて考え、その基礎的知識を習得していく。</p> <p>獲得可能な能力としては、マネジメントに関する能力、マーケティングに関する能力、システムデザインに関する能力、設計技術に関する能力である。</p>							
前提知識 (履修条件)	特になし							
到達目標	上位到達目標 製品やサービスを創る上で、実際の社会活動、企業活動における実践的課題を理解し、解決の方向性を示すことができるようになること。 技術視点の経営に関する課題を理解できるようになること。							
	最低到達目標 製品やサービスを創る上で、個々の課題を理解し、それらを克服するための方向性を示すことができるようになること。 技術視点の経営に関する学術的思考法を身につけること。							
授業の形態	形態		実施	特徴・留意点				
	対面 授業	録画・対面混合授業		○				
		講義（双方向）		—				
		実習・演習（個人）		—				
		実習・演習（グループ）		○				
	サテライト開講授業		○	実施日に注意（グループ議論の場合は実施しない）				
その他		—						
授業外の学習	講義の内容については、教科書、参考書を復習すること。							
授業の内容	<p>講義は毎回配布する資料を使用して行う。資料は独自にこの講義のために作成するもので、第1回から第15回まで連続したものである。毎回授業のはじめに重要ポイントを記述させる小レポートの課題を出し、終了時に回収する。このレポートの内容から把握できる受講者の理解度、問題意識の傾向などは、その後の講義内容に反映させていく。また、毎回できるだけグループ単位の議論を行い、自分の考え方や理解度を、受講生がお互いに確認できるようにしていく。</p> <p>ただし、本講義のテーマであるイノベーションという現象は、日々急激な変化や議論がなされており、必要がある場合は積極的に講義内容を最新の情報に当てはめるよう、変更していく場合がある。</p>							
授業の計画	回数	内容				サテライト 開講	対面/録画	
	第1回	講義概要 および 人工物設計の基礎理論 講義の目的と15回の学習内容の解説し、学生が講義選択の判断ができるようにする。また、技術経営領域の学習に際し、受講者がどのような理解をしているのかを議論しつつ、当該領域の概要についての説明を行う。 製品やサービスを扱う前に、人間が何かを創る行為についての基礎的な理論を理解する。特に、人工的なものを生み出すプロセスを理解し、人工物を設計していく行為を俯瞰的に考えていく。				—	対面	

	第2回	人工物設計の基礎理論に関するグループ議論	有	録画
	第3回	アーキテクチャ理論の基礎 製品やサービスなどの人工的なものを設計し、生産して上で、それらを理解するための手法を学ぶ。ここでは、構成要素間相互依存性に帰着したアーキテクチャ概念の基礎的な領域を解説していく。	—	対面
	第4回	アーキテクチャ理論の基礎に関するグループワーク	有	録画
	第5回	アーキテクチャ理論の応用 人工物の構成要素間相互依存性に関する基礎的な理論を理解したうえで、実際の企業活動などでどのように戦略などへ活用していくかを論じる。	—	対面
	第6回	アーキテクチャ理論の応用に関するグループワーク	有	録画
	第7回	グループプレゼンテーション① 第7回目までの内容をグループ単位でプレゼンテーションする。	—	対面
	第8回	技術マーケティング 製品やサービスを生産していく上で、ユーザーの要望は極めて重要な視点である。ここでは、顧客と企業を結び付ける情報の操作を中心に、様々な技術による新しい製品の開発を視野に入れながら、既存のマーケティングに加え技術視点のマーケティング論を展開する。	有	録画
	第9回	技術マーケティング	—	対面
	第10回	製品設計プロセス 製品の設計プロセスを取り上げて事例を中心にそれぞれの特性を解説していく。	有	録画
	第11回	製品設計プロセスに関するグループワーク	—	対面
	第12回	製品の普及活動 製品の社会への普及は開発者、設計者の重要な目的の一つである。各製品や組織の普及、販売に関する活動事例を見ながら、問題点や課題を解説していく。	有	録画
	第13回	製品の普及活動に関するグループワーク	—	対面
	第14回	総括 技術経営分野の全体像について、総括する。	有	録画
	第15回	グループプレゼンテーション② 第8回目から第14回目までの内容を、グループ単位でプレゼンテーションする。	—	対面
	試験	ペーパー試験は実施しない。（評価は、各回の個人レポートと、グループワーク、グループプレゼンテーションによるものとする。）	—	対面
成績評価	各講義の時間内に、講義内のポイントについて課題が出され、それを小レポートにまとめて提出する。（60%） 第7回と第15回にグループ単位でプレゼンテーションを行う。グループワークの成果とプレゼンテーションで評価を行う（40%）			
教科書・教材	吉田敏編著、『技術経営 —MOTの体系と実践—』、理工図書、2012年。			
参考図書	Joe Tidd 他著、『イノベーションの経営学』、NTT出版、2004年。 丹羽清 著、『技術経営論』、東京大学出版会、2006年。 前田正史、吉田敏 他共著、『Beyond Innovation 「イノベーションの議論」を超えて』、丸善プラネット株式会社、2009年。 藤本隆宏、野城智也、安藤正雄、吉田敏、『建築ものづくり論 Architecture as "Architecture"』、有斐閣、2015年			
獲得可能なコンピテンシー		獲得可能度合 (◎ ○ △ -)	獲得可能な内容	
メ タ	コミュニケーション	○	グループ議論を通じたコミュニケーション能力	
	継続的学修・研究	◎	抽象的なものを含む広範囲な内容を捉える論理的視点	
	チーム活動	○	グループによる議論とプレゼンテーションに関する能力	
コ ア	発想力	◎	ものづくりの立場からの発想力	
	表現力	△		
	設計力	△		
	開発力	○	技術の変化を前提とした開発力	
	分析力	◎	技術基盤のものづくりに関する分析力	

専攻名	創造技術専攻	必修・選択	選択	単位	2	学期	1Q
科目群	創造技術基礎科目群	科目名	イノベーション戦略特論			教員名	吉田 敏
		(英文表記)	Innovation Strategy				

概要	<p>イノベーションは、非連続性に基づいた経済の発展を表す一つの現象であり、技術の変化、市場の変化、組織の変化など様々なものに根ざす可能性を持っている。近年、国内の個々の企業において、今までの経営路線に行き詰まり、閉塞感が語られている感があるが、その反面、このイノベーションの可能性について期待感がある傾向が認められる。</p> <p>ここでは、イノベーションを支える構造とプロセスや、技術環境や市場環境におけるイノベーションの制約要因などを、実際の事例を参照しながら理解していくものである。</p>				
目的・狙い	<p>ここでの目的は、イノベーションを実践的・戦略的なレベルで理解するための知識を得ることと、実践するためのスキルに関する基礎的な内容を理解できるようになることである。</p> <p>わが国では、企業の設計力や技術力が優れているのに、それが利益に結びつかない場合が極めて多い。その一つの理由が、イノベーションのマネジメントに対する取り組みが十分に行なわれてこなかったことが挙げられる。そのためには、体系的に取り組みが必要になってくることを理解し、基本的な考え方について事例を通して体得していく。</p> <p>学習者はこの講義を通じて、現実に行われている社会活動、企業活動の中の課題を理解し、その対応のためのイノベーションの可能性を思考するための基盤的知識を習得できる。獲得可能な具体的な能力としては、マーケティングに関する能力、システム創造に関する能力、デザインに関する能力である。</p>				
前提知識 (履修条件)	特になし				
到達目標	上位到達目標				
	理解した実際の社会活動、企業活動における個々の課題に対し、デザインを中心とした感性面と品質や性能を中心とした機能面の両面から、克服するための方向性を示すことができるようになること。				
	イノベーションという現象を引き起こすための状況に応じた手法を示すことができるようになること。				
	最低到達目標				
授業の形態	実際の社会活動、企業活動における課題を理解すること。				
	イノベーションという現象を誤解なく理解し、その可能性の範囲を説明できるようになる。				
	形態		実施	特徴・留意点	
	録画・対面混合授業		—		
	対面 授業	講義（双方向）		○	
		実習・演習（個人）		—	
実習・演習（グループ）		○			
サテライト開講授業		○			
その他		—			
授業外の学習	講義の内容については、教科書、参考書、講義資料で復習すること。				
授業の内容	<p>講義は毎回配布する資料を使用して行う。資料は独自にこの講義のために作成するもので、第1回から第15回まで連続したものである。毎回授業の始めに重要ポイントを記述させる小レポートの課題を出し、終了時に回収する。このレポートの内容から把握できる受講者の理解度、問題意識の傾向などは、その後の講義内容に反映させていく。また、毎回できるだけグループ単位の議論を行い、自分の考え方や理解度を、受講生がお互いに確認できるようにしていく。</p> <p>但し、本講義のテーマであるイノベーションという現象は、日々急激な変化や議論がなされており、必要がある場合は積極的に講義内容を最新の情報に当てはめるよう、変更していく場合がある。</p>				
授業の計画	回数	内容		サテライト 開講	対面/録画
	第1回	講義概要 講義の目的と15回の学習内容の解説し、学生が講義選択の判断ができるようにする。また、今後の授業の進め方に反映するために、受講者のイノベーションについての知識や理解度を把握するために、簡単な課題をグループ単位で議論する。その他、第1回目の内容として、一般的なイノベーションについての概説や事例を示し、初歩的な知識を身につけていく。		—	対面
	第2回	イノベーションに関する体系化 イノベーションという現象を俯瞰的に理解するために、いくつかの視点より必要な体系化を行い、その内容を理解していく。		有	対面
	第3回	イノベーションの認識手法 現象であるイノベーションは、しっかりした視点を持たないと極めて不明瞭な理解にとどまる傾向がある。ここでは、認識するために必要な知見を身につけていく。		有	対面
	第4回	破壊的イノベーション		有	対面